

2022年春 旧→新 芸術監督対談

2022年4月、公益財団法人北海道演劇財団の芸術監督が交代しました。2016年4月から6年間芸術監督だったさいとうあゆむ 齋藤歩が退任し、後任には劇団清水企画の劇作家・演出家、札幌座のディレクター、北海道演劇財団の理事（7月より常務理事に就任予定）でもあるしみずともあき 清水友陽が芸術監督に就任しました。芸術監督としてのお仕事が始まって一月が経過したところを見計らって、前・芸術監督の齋藤歩と、新・芸術監督の清水友陽に、シアターZOOの舞台上と、演劇財団の会議スペースで、ヌルリと移行した現状について、対談をしていただきました。

聞き手：いそがけいこ 磯貝圭子（札幌座俳優・北海道演劇財団理事）



磯貝 清水さんが4月から芸術監督になりましたが、その前に歩さん、まずは、2016年から演劇財団には芸術監督という肩書が、急に生まれました。これはなぜですか？

歩 6年前、札幌に呼ばれて、演劇財団をどうにかしようとしていた時、どんな立場で働くことがいいのかを考えた結果がこれだったかな？

磯貝 歩さんの考えた芸術監督のやることって何だったんですか？

歩 4つある。演劇財団で制作する演劇作品のラインナップと品質について考えて決めること。

アウトリーチ事業、劇場運営、そして演劇財団全体の経営のこと。そのすべての方向付けをすることだと考えた

磯貝 歩さんが来る前は、経営のことと言うのは歩さん以外の方がやっていたと言いますか、プロデューサーと、ディレクターが分業していましたよね



歩 北海道演劇財団には、エグゼクティブディレクターでもあれば、エグゼクティブプロデューサーでもあって、全体の方向付けをする芸術監督が必要なんだと思った。経営と創造、この両面の方向性を決めていくタイプの芸術監督は珍しいと思う。でも、実際に始めてみて、こんなに全部やらなきゃならなくなるとは思わなかった。でもね、誰かがやるんだから、まずは全部自分でやれるようにしてみたいんじゃないかって思った

磯貝 歩さんが？

歩 劇場のことからアウトリーチから、人にやれって言うからには、やらなきゃと思って。すべてのワークショップの現場に行き、内容を点検したし

磯貝 やってましたね

歩 ワークショップの立案から助成金の申請、報告。劇場の掃除、運営とか、修理・メンテナンス、モギリ、受付とか劇団の受け入れとか。今振り返ってみると、すぐに誰かにこの仕事を渡しても大丈夫なように、必死に整え続けて来たんじゃないかなあと思う



清水 芸術監督がどういうものなのか、全く分からずに始めて1か月が経ったんだけど、やってみたら「ああ、全部やるんだな」って感じ。この人数で、全部やるってことがちょっとずつ見えてきた感じ。実は、歩さんがここ6年間取り組まれて来た、全ての仕事のやり取りが、財団のデータベースに残ってるんですよ



磯貝 全部ですか？

清水 全てのやり取りが残ってるんですよ、ワークショップから、地域での巡演の準備から、新作、再演の制作、あと…

歩 もし明日死んでもここを見ればわかるっていう具合にしてあるの

清水 ホントに、そうってるんですよ

歩 俺がいつ誰と何のやり取りしてたかが全部わかるから

磯貝 歩さんが戻って来てからは、中期計画が示されて、5カ年の計画で動き始めた印象がありました。3年後にここに辿り着くから、ここまではこうやろうということが明らかになった感じがした。以前は、突然の思い付きも多くて、振り回されている感が大きかった。劇団員を続けて来て感じたことです

歩 札幌に呼ばれてすぐ、当時の秋山理事長に5カ年計画を出せと言われて。それが最初の仕事。2021年度まで。とにかく「財務体質の改善」「創造作品の質の向上」「公益法人が取り組むべき事業としてすべての事業の質と内容のチェック」をやった。3年目でほぼ目標は達成できた。結局コロナで打撃を受けて、最終的には次の5カ年計画に残した部分もあるけどね。2016年度、最初の年はプレヒトの「肝っ玉おっ母とその子どもたち」とチーフホフの「北緯43°のワーニャ」、財団設立20周年で、この2つだけ創った。実はこの時から2年後、2018年度にベケットの「ゴドーを待ちながら」だと思っていた。

札幌からは納谷に相手役をお願いして、高田恵篤さん・福士恵二さんを東京から呼んで、ゴドーを創ると決めた。だから2016年に札幌に戻ってからは、実は「ゴドー」にひたすら向かっていったんだよね

磯貝 私と清水さん、スタッフで稽古場にずっとついて「ゴドー」に取り組むおじさんたちの姿を見てい



て、「ああ、こういうことをこれからは、札幌でやるってことなんだなあ」って思いました

清水 明らかに、それ以前と完全に違ってたんですね。やはりあの「ゴドー」からなんだなあって感じました

歩 何が違った？

清水 創り方、みせ方、スタッフの関わり方とか

磯貝 目指している水準が随分違うと思いました

清水 歩さんがもの凄く作品にきちんと向き合っている環境がありました。こういうことを札幌で続けられて、そこで作られたものをお客さんが観ることができるっていう状況が、いいこと、贅沢なことだよなあって。本当にあの現場が面白かった。ああいう俳優とスタッフが集まると、歩さんは、ああなるんだってのが…

歩 やっぱ「ゴドー」のレベルとスケールのものを北海道のお客さんに見ていただくことを水準に考えるのが、北海道演劇財団の公益法人としてのミッションなんじゃないか。だから、出来れば毎年、このレベルの創作をと思って、2019年度は納谷の演出で「虹と雪、慟哭のカッコウ」、2020年度、5年目には「北緯43°のリア」。「リア」の場合、あのぐらい人数が必要だから俳優をすべて東京から呼ぶわけにもいかなかったし、環境としては「ゴドー」ほど贅沢な環境ではなかった。でもまあ、やった。で6年目に「暴雪圏」の再演、これもまあ、約束してたって言うか、やらなきゃならないと思って、クリエイティブスタジオでやった。で今、自分のカードを切りつくした感がある。



実は「ゴドー」が終わった時から、2021年あたりで誰かに芸術監督は引き継いだ方がいいなあって考え始めていた

磯貝 え？そんな前から？

歩 清水に最初に話したのっていつだった？

清水 ちょくちょく歩さんとは、まあ色んな話してたんだけど…具体的に芸術監督って話が出てきたのは、この2年ぐらいですかね？

歩 一緒に地方に行った時とか、紋別へ行った時、ワークショップが終わって居酒屋とかホテルの部屋とか。洞爺湖温泉の旅館の部屋とか風呂場とか。朝日町の合宿所とか、まあ、旅先が多いなあ

磯貝 徐々に、やってみようかなあ、みたいな感じになったんですか？

清水 よおーし、やってみよー！とかは、思っていないですよ。今も、「俺はやるんだ」とは思っていないですよ。ただ、シアターZOOのような劇場がこの街にあるってことは面白いことだし、劇を創る場所っていうのは絶対あった方が街は面白いと思うんですね。その中の仕事として、今、自分も少しずつ歳をとってきて、出来ることがちょっ

とは有ったりするわけで、そんなことを役立たせながら、この街でそういう仕事をするのは興味深いなあって今は思ってます。歩さんの「ゴドー」みたいなものを、また創ってもらいたいし、そのためには、僕みたいな男が芸術監督みたいなことをしていた方が、この街に面白い劇が一つ増えるんじゃないかとも思うんです。勿論僕も作品を創り続けますけど、僕の創るものって、もうちょっと小さなものが面白いと思っていて、それこそ、シアターZOOで創ったりするのがちょうどいいと思ってて、もっと大きなものもあった方が良くて、そういうのを歩さんをお願いしたりとか、納谷さんに任せたりしながら、数が増えて行く、質も上がって行く、お客さんも一緒に育って行く、そういう風になって行くこの街も面白くなってゆくと。もう一回「ゴドー」みたいなものを観たいってのが、芸術監督として一番の原動力です

磯貝 今年は何て言うか、移行期間なんですか？

歩 独特の一年でね。これが面白いと思うんだけど、前年度2021年度中に、今年度2022年度のプログラムは、俺が組み立てちゃったじゃない？だから、4月からは清水が芸術監督なんだけど、実施しているプログラムは、前任者が組み立てたプログラムなんだよね。で、こういうことをやりながら、今年の秋ぐらいまでには、清水はもう来年のプログラムを確定させなきゃならないんだよ。だから、こういう一年が貴重で、いいんじゃないかなあって思う

清水 3年ぐらい前から、先行してワークショップの組み立て全体を徐々に任せてもらった。これから覚えて行くことも、一つ一つ自分なりに理解して、自分のものにしてゆくんと思う

歩 北海道に居て、今、日本語で創られる演劇の水準っていうものをどう考えるか？ということが求められていると思っていて、決して尖がっているわけでもなく、きちんと時代を反映している演劇を創る。その基準を北海道で考えるのがいいと思って、やってきたのね…これは、最初の北海道演劇財団の常任演出家として東京から招かれた松本修さんが続けてきたことに始まって、文学座の坂口芳貞さんに何度も来ていただいて養成所を作ったことだったり、串田さんに来てもらって、シアターキャンプをやったこともそうだし、最初TPSだったのが札幌座になったり、全部俺が札幌に来る2016年以前に、平田さん、新堂さんが築いてきた演劇財団の「系譜」みたいなものを、一応踏襲して、俺なりに反映させた6年だったつもりなんだよね。で、清水はどうやるのかってことなんだけど。それを清水は変えてもいいと思うんだよ。意識しないうちに引き継がれてしまうものもあるだろうし、変わって行くものもあっていいと思う。俺は設立当初から、かなりこの演劇財団に関わり続けて来ちゃったからね。清水の場合はどう考えるか。自由に演劇財団というものをイメージしていいと思うなあ

清水 歩さんが随分前にやったイブセンの「ペールギュント」の時のように、シアターキャンプでものを考えて作って行くってことを、もう一回やりたいなあって思っています。シアターキャンプを通じて、異なる世代と一緒に合宿して、あの時も櫻井幸絵ちゃんとか、僕とか、すがの公くんとか、歩さんより若い世代が集まって合宿したりしたじゃないですか。僕の一世代下って誰なんだろう？ってこともやりたいですね。歩さんが「亀、もしくは…」に僕たちの世代を呼んでくれて、あっちこっち旅して、韓国とかロシアまでも何回も行ったりして。2024年に札幌駅の北口にできる「北八劇場」との住み分けも考えると、シアターZOOは若い劇団が活発に使ってもらえるようになるといいのかなあとか

歩 やっぱ、芸術監督として、その劇場をジ〜っと見て、その劇場と一緒に呼吸をして、その劇場の痛みとか喜びとかを感じられないと、そのぐらい、そこに愛情を注いであげないと、特に最初はね、その劇場は良くならないと思うし、普通、芸術監督だ、なんて言われたら、心配で心配でそうしちゃうんじゃないかと思うんだよ俺は。そうやって、ジ〜っと見ることで、愛着とか、愛情とか、空間の弱点も含めて理解した芸術監督がいるってことが、必要なと思う。でもね、日本中でこんなに創りたい演劇を創り続けている仕事ができる現場やポジションってないんじゃないかなあ、しかもかなりダイナミックに。札幌って、こんなにも演劇の仕事をさせてもらえるんだってね。そんな経験は、もっと若い40代でやるべきだろうと思った。清水はギリギリ40代じゃないか。大丈夫だよ

磯貝 清水さんは、常勤して1か月が経ちましたけど、どうですか？

清水 まず毎日朝、決まったところに座ることが初めてで、僕働いたことがないですよ。電話の取り方もわからない。一つ一つ課題をクリアしてゆくしかない。当たり前なことなんだけど、協賛社を回って説明したり、わかってもらって面白がってもらったりしなきゃならない。当たり前なことなんだけど、そういう仕事があって初めて、こういう劇場が存在出来て、劇が創れたりするってことを理解したり

磯貝 清水さんは、常勤して1か月が経ちましたけど、どうですか？

清水 まず毎日朝、決まったところに座ることが初めてで、僕働いたことがないですよ。電話の取り方もわからない。一つ一つ課題をクリアしてゆくしかない。当たり前なことなんだけど、協賛社を回って説明したり、わかってもらって面白がってもらったりしなきゃならない。当たり前なことなんだけど、そういう仕事があって初めて、こういう劇場が存在出来て、劇が創れたりするってことを理解したり

歩 私も理事長としての仕事は続けますので、清水にはまずは、芸術監督として、演劇財団の方向付けを一つ、最低でも5年間はお願したい

磯貝 今後、ワークショップってどうなって行く？

清水 講師ができる人材をもっと増やさなきゃならないですね。きちんとした講師をね。一人で任せられる講師。やる気だけじゃどうにもならないから、新しい人とまた、出会わなきゃなあって思ってますね。まあ、とにかくコツコツやって行く、歩さんが言っていたように、時間をかけて丁寧に積み重ねて一つ一つ自分の中に作り上げて行く。あと僕は、周りの人と一緒に創るのが基本好きなので、札幌座の人たちだけじゃなくて、仲間が増えてゆくといいかなあ

歩 既に俺とは随分違うよね。いいんじゃない？俺の口から「仲間が増えるといいなあ」とか絶対出てこないからね。素晴らしいと思います



ごあいさつ

4月から、北海道演劇財団の芸術監督になりました。

「芸術監督とはどんな仕事をする人なのか？」と考え続けた1か月はあっという間に過ぎ去りました。前任の齋藤歩さんの考え方を引き継ぐ場面もたくさんあるでしょうし、私ならどうするだろうと立ち止まって考えてみる場面がこれから次々とやってくることでしょう。毎日、考えて、やってみて、また考えての日々が続くのだと思います。

これから色々と具体的にしてゆかなければなりません。私が大切にしたいなと思うのは、子どもたちや若い人たちがわくわくする場所を用意することです。演劇財団の仕事で関わってきた企画「劇のたまご」シリーズに足を運んでくださる親子の笑顔を見たり、アウトリーチで行っているワークショップで、参加して下さった学校や地域の人たちが楽しそうに表現に触れる姿に出会い、心を動かされ続けてきたからです。ここに、私の仕事の入口があるのではないかという気がしています。もちろんその先には、誰もが楽しめる上質な演劇作品を、道内外、海外からお呼びして観ていただいたり、専門家の人たちだけでなく地域の皆さんと何かを創ってみるのも楽しそうです。演劇財団が運営するシアターZOOという劇場が、表現する人たちにとっても、地域の人たちにとっても、愛しい場所になればいいなと考えています。そのためには、私をもっとシアターZOOの良い面も不便な面も含めて知ってゆくこと、見つけてゆくこと、生み出してゆくこと。わくわくする仕掛けを作って、それを実際に動かしてゆくこと。そして、先輩たちがそうしてきたように、街にある劇場を次の世代の人たちへと引き継いでゆくこと。それが、私にとっての芸術監督の仕事なんだなと思います。そして、ただ劇場で作品をご覧いただくだけでなく、外に出たときに、ああでもないこうでもない、思いを巡らせたくなり、議論したくなるような装置が、この街にあり続けることが、とても必要なことだと考えています。

ひとつひとつ、こつこつと進んでゆこうと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

清水友陽



しみずともあき
清水友陽プロフィール

演出家・劇作家。札幌で活動する劇団清水企画代表

創作活動以外にも、子どもたちを対象にした表現ワークショップや
大学で表現の授業の非常勤講師を務める

2012年より、札幌座のディレクターに就任

2022年7月より公益財団法人北海道演劇財団 常務理事・芸術監督

2022年5月31日発行
公益財団法人 北海道演劇財団

〒064-0811

札幌市中央区南11条西1丁目3-17 ファミール中島公園1F
TEL: 011-520-0710 Mail: office@h-paf.ne.jp